

Masahiko Fujita²⁾, and Eigo Takabatake³⁾ :
 J. ASSOC. OFF. ANAL. CHEM. 68, 27-28, 1985
 鶏肉からエトパベートをアセトニトリルで抽出し、濃縮後、酢酸エチルに転溶し、次いでフロリジルカラムでクリーンアップを行った。ゾルボックスODSカラムを用い、移動相は、アセトニトリル：0.01MKH₂PO₄：トリエタノールアミン（40：59：1）をリン酸でPH4.0としたものを用い、励起波長306nm、蛍光波長350nmで検出した。0.01ppm及び0.05ppmのエトパベートを添加しそれぞれ87.8、92.7%の回収率を得た。検出限界値は100pgであった。

- 1) 千葉県衛生研究所 2) 国立公衆衛生院
 3) 摂南大学

高速液体クロマトグラフィーによる鶏肉中チアンフェニコールノ定量法。永田知子¹⁾、佐伯政信¹⁾、中沖裕之²⁾、藤田昌彦²⁾、高島英伍³⁾、食品衛生学雑誌、26、46-49、1985

鶏肉からチアンフェニコールをアセトニトリルで抽出し、n-ヘキサンで洗浄した後、アセトニトリル層を乾固した。残渣をセップパックフロリジルカラムを用いてクリーンアップし高速液体クロマトグラフィーに供した。ゾルボックスODSカラムを用い、移動相をメタノール：水（1：9）とし230nmで検出した。添加回収率は、0.05、1.0、5.0ppm添加でそれぞれ70.6、86.4、94.1%であった。検出限界値は5ngであった。

- 1) 千葉県衛生研究所 2) 国立公衆衛生院
 3) 摂南大学

VII 学会発表

九州地区産イエバエの殺虫剤感受性について(2)。林 晃史¹⁾、新庄五朗²⁾、牧田光康²⁾、日本衛生動物学会、広島市、1984. 4. 2~4

九州、宮崎県下の数ヶ所からイエバエを採集し、ピレスロイドに対する感受性について調査した。

レスメトリンに対し、前年よりも感受性の低下傾向はあるが、問題になるレベルの低下ではなかった。なお、感受性の低下した地区では、協力剤を配合すれば容易に防除する事が出来た。

- 1) 千葉県衛生研究所 2) 住友化学工業(株)農業研究所

室内じん中ダニ類の防除について。林 晃史：日本衛生動物学会殺虫剤研究班大会、東京都、1984. 5. 23

集合住宅で多発生し、問題になっている室内じん中ダニ類ノ殺虫剤にする駆除を実地で検討し、その結果について報告した。

実験には、ペルメトリレとプロボクスルを用いたが、いずれも効果的で、特に、プロボクスルは残効性に富んでいた。

一般家庭で、各自が駆除する場合は、ペルメトリン燻煙剤で室内全体の殺虫処理を実施すると共に、プロボクスル油剤を新聞紙に処理し、畳の下に設置することにより、長期間にわたって効果のあることを明かにした。

脂質代謝からみたカドミウム投与ラットの精巣における炎症発生メカニズム。佐二木順子¹⁾、平井愛山²⁾、田村 泰²⁾、吉田 尚²⁾：第5回日本炎症学会、東京都、1984、7.13~14

CdCl₂中毒ラットの精巣炎症には、脂質過酸化が深く関与しているものと考えられている。そこで、脂質過酸化のメカニズムを解明するため、リン脂質ならびに遊離脂肪酸含量の経時変化、脂肪酸構成等について調べた。

その結果、CdCl₂投与後6時間目に精巣においてアラキドン酸の遊離が著しく亢進していることが明らかであった。

このことから、リン脂質からのアラキドン酸遊離が過酸化脂質生成のイニシエーターになっている可能性を示唆するものと考えられた。

- 1) 千葉県衛生研究所 2) 千葉大学医学部

NAG ビブリオが産生するカルベニシリン分解型 β -lactamaseについて. 内村真佐子¹⁾, 小岩井健司¹⁾, 三瓶憲一¹⁾, 矢崎廣久¹⁾, 高橋郁子²⁾, 沢井哲夫²⁾: 第57回日本細菌学会総会, 札幌市, 1984. 7. 18~20

河川水から分離したNAGビブリオ40株について薬剤耐性試験を行ったところ, 34株(85%)がアンピシリン耐性を示した。このアンピシリン耐性株は, カルベニシリン分解型ベニシリナーゼを産生した。このベニシリナーゼは, Pseudomonas属に特異的と言われていたPSE-1型ベニシリナーゼと, 分子量・基質特異性及び免疫学的性状が類似していた。

1) 千葉県衛生研究所 2) 千葉大学医学部

気候等の条件と豚日本脳炎HI抗体価の疫学的考察. 市村 博, 北山秋雄: 第49回日本民族衛生学会, 弘前市, 1984. 7. 28

演者らは, 日本脳炎ウイルスの活性因子として, 夏期の気候を考え, 1981年の日本公衆衛生学会(福岡市)で気温と豚日本脳炎HI抗体の消長を経年的に検討し報告した。今回は, 1982年, 1983年の資料を加え, 日照時間, 降雨量とHI抗体価の消長について経年的に検討を加えた。(気象資料: 銚子気象台発表の千葉県気象月報)

日照時間の長さ, 降雨量の多い, 少ないでは, 豚日本脳炎HI抗体価の変動について, いちがいに論ずることは出来ず, 1978年の如きは, 調査した19年間で, 降雨量は一番少なく, 日照時間が長い年であるにもかかわらず抗体は8月中旬までは動かず, 100%陽性も10月に入ってからであった。

低年齢層における麻疹患者の疫学的考察. 北山秋雄, 市村 博: 第49回日本民族衛生学会, 弘前市, 1984. 7. 28

麻疹の定期予防接種では, 0歳児は任意接種の対象になっている。一方, 厚生省の「感染症サーベイランス情報」等により, 麻疹患者の発生状況をみれば, 0歳児患者の割合が経年的にみて, およそ一割に達している。特に, 千葉県では, 1982年以来増加傾向を示している。そこで, 0歳児の抗体保有状況及び患者発生状況を調査し検討を加えた。抗体保有状況は赤血球凝集抑制(HI)抗体をマイクロタイター法により測定した。その結果, 生後6ヶ月までは月齢が高くなるにつれて, 抗体保有率が減少していく傾向がみられた。生後6ヶ月以上の乳児でも8倍以上の抗体価を保有しているものは12.7%と少なく, 麻疹に罹患する可能性が高いことを裏付ける結果が得られた。臨床上0歳児の麻疹患者がどの程度みられ

るか, アンケート調査を実施した。

PCB 画分を指標とする食品モニタリング.

—ムラサキイガイにおけるピークパターンの標準化について— 吉岡 康, 保坂久義, 加藤嘉久, 佐伯政信: 第21回全国衛生化学技術協議会年会, 山口市, 1984. 9. 28

PCBは現在一定レベルで推移し, ガスクロマトグラムのピークパターンが生物種, 採取値で特異なことからこれを数値化して標準ピロフィルとし, これからのズレで異常を検知する方法を検討した。ムラサキイガイを定点で毎月1回1年間採取, その変動から標準パターンを算出, これを汚染の少ない地域, 同一湾内の他地域, PCBで汚染させたものと比較したところ汚染度, 地域差, 取り込みが検知され, 各種食品への応用が示唆された。

輸入食品の残留農薬について. 加藤嘉久, 保坂久義, 吉岡 康, 佐伯政信: 第21回全国衛生化学技術協議会年会, 山口市, 1984. 9. 28

1981年から1983年の間に採取した落花生, 冷凍食品, 果実, コーヒー生豆および食肉の計24種187検体について残留農薬を調査した。落花生ではBHC, DDT等の有機塩素系農薬が検出され, BHCが比較的高濃度であった。果実ではかんきつ類から比較的高濃度のメチルグテオン, パラチオンの有機りん系農薬が検出された。その他食品の有機塩素系農薬は全般的に低い残留量であった。

Cd 投与ラットの精巣障害と生体内 Ca. 佐二木順子, 福島悦子, 藤代良彦: 第11回環境汚染物質とそのトキシコロジーシンポジウム, 札幌市, 1984. 10. 16~17
ラット生体内Caの精巣障害への関与について調べるため, Cd投与ラットの生体内Caの経時変化を検討した。また, Ca拮抗剤の精巣炎症に対する効果をも調べた。その結果, Cd投与によるラット精巣障害発症過程において生体内のCaが重要な役割を果たしていることが明らかになった。

千葉県におけるつつが虫病について. 時枝正吉: 第8回小児感染症懇話会, 千葉市, 1984. 10. 19

本県における患者の最近の発生は, 昭和57年10月以降, 県南部館山, 鴨川, 勝浦地方を中心に多発し, 現在では千葉, 市原, 成田地域においても見られ, 発生地域も広がる傾向が見られる。59年10月現在で患者の報告は120名を越え, 血清学的診断法(間接免疫ペルオキシダーゼ法, 間接蛍光抗体法)で80%以上が確認されている。また発生状況はタテツツガムシの媒介による秋から冬季に

て多発し、患者は主として農作業に従事する40才以上で、男女に関係なく高年齢者に多かった。

清掃補助剤の室内じんダニ類におよぼす影響。

林 晃史，平岡正啓：日本衛生動物学会西日本支部大会，津市，1984，10，31

室内じん中ダニ類を殺虫剤を使用しないで駆除する手段として掃除の効果を検討した。

所定面積内のダニは，掃除を徹底する事で顕著に減少し，入念な清掃はダニ類の生息密度を下げるのに効果のあることが明かになった。

なお，この場合，清掃補助剤（粉末）を併用することにより，ダニ除去効果が顕著に増大することが明かになった。

1) 千葉県衛生研究所 2) 小林製菓研究所

イガいのPCB画分を指標とした洋上飼育による環境モニタリング。吉岡 康，保坂久義，佐伯政信：第43回日本公衆衛生学会，大阪市，1984，11，1

環境中の汚染物質を検出するために，汚染水域に非汚染水域から生物を移植し，その生物について濃度変化を追跡する方法を検討した。PCB汚染の少ない利尻島のイガイを千葉中央港，養老川河口でホタテ貝養殖用網カゴに入れて20日間飼育したところ，濃度は4日目から有意に上昇し，7日間で3～5倍の増加，ピークパターンは飼育環境を反映したピロフィールを示したので，本法は監視システムにおける検知指標として有用であった。

低年齢層を中心とした麻疹患者の疫学的研究。

市村 博，北山秋雄，山辺靖子，時枝正吉，太田原美作雄：第43回日本公衆衛生学会，大阪市，1984，11，2

1983年，千葉県での麻疹流行は，前年に比して70%増の患者発生があり，明らかに流行年であった。この流行の中で，麻疹ワクチン接種対象年齢より前の0才児の患者が増加傾向にあることが，感染症サーベイランス情報等で認められた。さらに0才児の患者群を詳細に検討するため，患者発生の実態をアンケートで，また，臍帯血，0才児，小児，学童，妊娠可能年齢女子等の血清を使い麻疹HI抗体の保有状況を把握した。その結果，生後6ヶ月頃までに，母児間の移行抗体が，134例中67例（50%）しか認められず，比較的早く母児免疫が消退しており，生後7ヶ月以降でも，8倍以上の抗体を保有する者が12.7%（8/63）と少なく，アンケートで得られた成績とよく一致している。

千葉県における日本脳炎の血清疫学的調査。

山辺靖子，春日邦子，酒井利郎，海保郁男，時枝正吉，市村 博，太田原美作雄：第43回日本公衆衛生学会総会，大阪市，1984，11，2

例年豚血清による日本脳炎流行予測事業が赤血球凝集抑制試験法（HI試験）を用いて実施されている。本県でも15年ぶりに昭和57年2名，58年2名の患者発生を見たので，県内住民の血清を用いて各年齢群別にHI抗体保有状況，また一部についてワクチン接種歴の調査を行ない検討を試みた。年齢群により抗体保有状況に差を認め，JaGAR株は中山株に比べ抗体保有率が高い傾向が見られた。また非接種群では両株共に陰性者が80%を示めた。

食肉および食肉製品から分離した黄色ブドウ球菌のIDテストにおける性状。

三瓶憲一¹⁾，尾上洋一²⁾，今野純夫³⁾，品川邦汎¹⁾，小沼博隆³⁾，倉田 浩³⁾：第5回食品衛生微生物研究会，川崎市，1984，11，8～9

食肉および食肉製品由来ブドウ球菌のうち，従来の試験法（従来法）でS. aureusと同定された菌株について，IDテスト・SP-18を用い生化学性状を調べた。また本キットと従来法による性状を比較し，本キットの有用性を検討した。その結果，IDテストによる性状中，リボース分解陰性株が多数認められた。しかし，これらは従来法ですべて陽性であることから，本キットはさらに改良が必要と思われた。

1) 千葉県衛生研究所 2) 神奈川県衛生研究所
3) 仙台市衛生試験所 4) 岩手大学農学部
5) 国立衛生試験所

Campylobacterの生物性状について。新井俊彦¹⁾，日下部敦子¹⁾，小松貞男¹⁾，小岩井健司²⁾：第52回日本細菌学会関東支部総会，甲府市，1984，11，16～17

Campylobacterの酵素活性については，現在までのところあまり報告されない。そこで，他の菌種ではよくみられるトリピシン等のピロテアーゼ活性を中心に酵素活性を調べた。その結果，Campylobacterは他の多くの菌種に比べて，非常に酵素活性の少ない菌であることが明かとなった。なお今回使用した基質ではC. jejuniとC. coliを区別することはできなかった。

1) 慶応大学医学部 2) 千葉県衛生研究所

Mechanism of CdCl₂-induced inflammation in rat testis. J. Sajiki¹⁾，A. Hirai²⁾，Y. Tamura²⁾：Kyoto Conference on Prostaglandins，1984，

11, 25-28

抗酸化剤(ビタミンE, コエンチームQ)ならびにカルシウム拮抗剤(ベラパミール)がCdCl₂によるラット精巣障害を著しく抑制した結果, ならびに脂質代謝に関する結果より, Cd投与による精巣炎症において, リン脂質からの脂肪酸の遊離にCaがトリガーとして働いている可能性が示唆された。また, 引き続き生ずる遊離高紙不飽和脂肪酸の酸化が細胞の壊死を導くものと考えられた。

1) 千葉県衛生研究所 2) 千葉大学医学部

最近のつが虫病について, 時枝正吉: 第22回感染症懇話会, 千葉市, 1985, 2, 28

昭和50年以降全国各地において多発しているつが虫病患者はフトゲツツガムシ, タテツツガムシ媒介性を中心としたつが虫病であり, アカツツガムシ媒介性のつが虫病は秋田県地方に少数の患者発生を見るのみである。患者の発生時期には全国各地で多少の差があり, 春~初夏(フトゲツツガムシ)と秋~冬(フトゲ及びタテツツガムシ)に区別され, 本県では秋~冬に患者が多発している。発生状況は川村明義博士らの報告によれば, 昭和56年457名, 57年538名, 58年718名, 59年932名に達し, 秋田, 新潟, 東京, 千葉, 群馬, 静岡, 岐阜, 宮崎, 鹿児島等の都県では20名を越える患者が多発し, 年を経るごとに発生患者が増加していることが注目される。

千葉県における健康小児の百日咳抗体保有状況 内村真佐子¹⁾, 三瓶憲一¹⁾, 小岩井健司¹⁾, 北山秋雄¹⁾, 矢崎廣久¹⁾, 堀内善信²⁾, 江下倉重²⁾: 第23回千葉県公衆衛生学会, 千葉市, 1985, 3, 12

百日咳菌の構成成分である, F-HA及びLPF-HAを抗原として用い, マイクロELISA法に関する基礎的検討を行った。その結果, 用いるマイクロプレートのロットにより, ウェル間のバラツキが異なる場合があり, 標識抗体が異なると測定値(吸光度)に差がでてくることが明らかとなった。この方法を用いて, 健康児100名の抗体調査を行った結果, ワクチン接種群と未接種群の抗体保有状況に明らかな差が見られ, ワクチン接種の有効が示された。

1) 千葉県衛生研究所 2) 千葉県血清研究所

下痢・食中毒等の検査材料から分離された病原菌について, 小岩井健司, 三瓶憲一, 内村真佐子, 矢崎廣久: 第23回千葉県公衆衛生学会, 千葉市, 1985, 3, 12

1984年に当所に送付あるいは当所で分離された下痢・食中毒由来の菌株は363株で, うち100株は海外渡航者由来である。海外由来株はサルモネラが最も多く, 次いで腸ビブリオ, 赤痢菌であった。集団発生は赤痢菌2例, 腸炎ビブリオ8例および毒素原性大腸菌によるもの2例で, 毒素原性大腸菌による2事例は, 患者数がそれぞれ532名, 798名に及び, いづれも同一施設で作られた給食が原因と推定された。

食鳥処理場におけるカンピロバクターの汚染実態,

小岩井健司¹⁾, 三瓶憲一¹⁾, 矢崎廣久¹⁾, 村井樞夫²⁾, 北村忠夫³⁾, 立野 泰³⁾, 本木義雄³⁾, 江畑嘉臣³⁾, 野口英生³⁾: 第23回千葉県公衆衛生学会, 千葉市, 1985, 3, 12

鶏肉のカンピロバクターによる汚染を減少させる目的で, 処理場における鶏肉と処理工程の汚染状況について調査した。その結果, もも肉等の可食部では37%(27/73)に汚染が認められた。一方, 処理工程では脱毛直後の丸と体や冷却水等, 工程の極く初期からその汚染がみられた。可食部の汚染は, 処理工程の汚染に起因するものと考えられ, 今後, 新しい解体方法の導入や, 冷却水等への塩素剤などの適切な消毒剤の利用を検討する必要がある。

1) 千葉県衛生研究所 2) 市原保健所
3) 中央保健所

千葉県におけるつが虫の血清疫学的調査研究,

海保郁男¹⁾, 時枝正吉¹⁾, 山辺靖子¹⁾, 春日邦子¹⁾, 酒井利郎¹⁾, 北山秋雄¹⁾, 市村 博¹⁾, 七山悠三¹⁾, 太田原美作雄¹⁾, 瀬戸季子²⁾, 高橋金雄²⁾: 第23回千葉県公衆衛生学会, 千葉県, 1985, 3, 12

1982年10月以降千葉県南部において, つが虫病が多発したことから, 1983年度に採取した館山市及び鴨川市の住民血清について間接蛍光抗体法(IFA)により抗体調査を行ない, リケッチアの浸淫度を知ることにより有毒地の推定を試みた。その結果, 館山市16地区の抗体保有率は平均14.4%であり, 特定一区28.7%と高くその隣接地でも保有者が見られた。鴨川市6地区住民の抗体保有率は平均16.4%であった。

1) 千葉県衛生研究所 2) 安房医師会病院

千葉県感染症情報における図式化の検討,

北山秋雄¹⁾, 市村 博¹⁾, 太田原美作雄¹⁾, 遠藤 明²⁾: 第23回千葉県公衆衛生学会, 千葉市, 1985, 3, 12

昭和56年11月より, 県内77カ所の医療機関を定点とした感染症サーベイランス事業は今年で4年目を迎え, そ

の情報解析は感染症の防疫対策の一助として活用されている。

演者等は、情報還元の5大要因といわれる、①正確、②新鮮、③迅速、④平易、⑤有用に配慮した感染症情報として「感染症天気図」を考案した。これは、当該週とその前週の一定点当りの患者発生状況の変化を疾病別に天気図にて表現する。本法の特徴は、統計推計学を演用して独自の5段階評価を用いたり、流行値を設定していることである。それは同時にパーソナルコンピュータによる情報解析を可能にした。今回は1982年と1983年の情報で5段階評価値や流行設定値を算出した。

1) 千葉県衛生研究所 2) 千葉県衛生部保健予防課

ヘッドスペースGC法による外用剤中の l -メントール、 d l -カンフル、サリチル酸メチルの同時定量法。 中島慶子、安田敏子：第23回千葉県公衆衛生学会、千葉市、1985、3、12

局方「複方サリチル酸メチル精」、「歯科用フェノール・カンフル」、試作した消炎鎮痛塗布剤、試作したパップ剤中の l -メントール、 d l -カンフル、サリチル酸メチルの定量の簡便化について検討した。従来法では蒸留、抽出、ガスクロマトグラフィーを行なっているが、本法ではヘッドスペースGC法を用いることにより、簡便迅速化することができた。得られた定量法は再現性、回収率ともに良好であった。